

令和6年度

第43回 宇治市「中学生の主張」大会 まとめ



主催：宇治市教育委員会・宇治市青少年健全育成協議会・宇治市連合育友会

はじめに

本大会は、昭和57年に、中学生の願いや希望を友達や大人に知ってもらおうという思いから始まり、今年度は、令和6年11月9日に第43回宇治市「中学生の主張」大会として、宇治市文化センター小ホールにおいて、開催することができました。

この間、子どもたちを取り巻く環境は大きく変わり続けています。デジタル技術の進展は、新型コロナウイルス感染症の期間を経て、より一層進みました。加えて、コロナ禍の期間に、対面で人と接する機会が減少したことにより、人間関係が希薄化した影響が心配されます。

そのような中で、市内11中学校の代表生徒が、学校生活や私生活で体験したこと、家庭でのやり取り、地域の人々との交流などによって、普段感じていることを中学生の鋭い感性と素直な気持ちで表現した、素晴らしい主張を発表してくれました。また、2階のロビーでは、宇治支援学校における取組の紹介や中学部生徒の作品展示を行い、多くの方にご覧いただきました。

この大会に向け、表紙絵を作成された生徒は、様々な思いをこめて作品を作り上げ、司会及び主張を発表された生徒の皆さんは、伝わりやすい話し方、抑揚、読み上げる速度など、各自で工夫を凝らし、練習されてきたことと思います。そして当日、大勢の来場者の前で、緊張感のある空気の中で司会・発表をされました。そういった経験は、今後の人生の大きな財産になると考えます。

今年度もここに、『第43回宇治市「中学生の主張」大会まとめ』を発刊する運びとなりました。このまとめ冊子をご一読いただき、青少年の健全育成へのご支援・ご協力がさらに充実・発展していくことを期待しております。

結びにあたり、本大会の開催及びまとめの刊行にあたり、ご尽力を賜りました関係各位に厚くお礼を申し上げます。

宇治市教育委員会
教育長 木 上 晴 之

◆目次

開会のあいさつ	実行委員長	き木	がみ上	はる晴	ゆき之	……	1
主張発表							
責任	西小倉中学校	3年	あさ浅	だ田	り莉	ま茉	…… 2
戦争という過ち	広野中学校	3年	いの井	うえ上	れい玲	ね音	…… 3
「家族の形」とは	立命館宇治中学校	3年	あさ浅	わ輪	ゆう優	た太	…… 4
怪我から学んだこと	東宇治中学校	3年	やま山	もと本	り梨	む夢	…… 5
夢を持っていない自分	西宇治中学校	3年	まつ松	もと本	り莉	な奈	…… 6
私のこと	北宇治中学校	2年	つじ辻	い井	ゆ柚	め芽	…… 7
体感時間	南宇治中学校	3年	まつ松	むら村	る瑠	あ愛	…… 8
「守られる」から「守る」に	木幡中学校	3年	こ小	ばやし林	つばめ		…… 9
命のつながり	槇島中学校	3年	ゆ湯	かわ川	はは	なな	…… 10
犬か猫か	黄檗中学校	3年	は羽	ね根	だ田	さ沙	なみ南 …… 11
家族を想う毎日	宇治中学校	2年	さか酒	もと本	もも百	か々香	…… 12
講評	宇治市連合育友会	会長	あお青	き木	ひで英	あき明	…… 13
表彰	三賞表彰及び全員写真						…… 14
『大会の振り返り』	大会を振り返っての写真集						
宇治市「中学生の主張」大会	京都府立宇治支援学校による展示コーナー						…… 15
閉会のあいさつ	宇治市青少年健全育成協議会						
	会長	しま	しげ	ゆき	繁行		…… 16
京都府立宇治支援学校中学部の学び							…… 17
主張発表生徒・司会生徒・表紙絵作成生徒と市長との懇談会							…… 18
第43回宇治市「中学生の主張」大会実行委員一覧							…… 19

開会のあいさつ

本大会は、昭和50年代に、中学生の問題行動が大きく取り上げられていた中、「普通に学校生活を送っている多くの中学生の願いや希望を、友だちや大人たちに知ってもらおう。」という思いから始まりました。今回で43回目となりますが、この間、子どもたちを取り巻く問題行動については、社会情勢の変化とともに、インターネットやSNSによるトラブルやいじめなどが増えるなど、深刻かつ複雑なものとなっています。

子どもたちがこのような時代を生きていくためには、自分の気持ちを自分の言葉で伝える力や友達の考えをしっかりと聞くことができる力を身に付け、判断力や想像力を育むことが必要です。

中学生のみなさんは、大人になる不安や悩みだけでなく、社会への思いや希望を抱いていると思います。そのような不安や悩み、将来への夢や希望を自分の言葉で語るとともに、友だちの考えをしっかりと聞くことにより、自分自身の未来について考える機会となるなど、本大会の持つ意義は大きなものがあります。

今年も、宇治市内の11中学校の代表が、日々の生活を通して、広く社会に向けた思いを、そして、未来への夢や希望を豊かな感性でとらえ自分の主張として発表します。また、宇治支援学校はロビーにて、日ごろの生徒たちの活動や取組の発表、作品の展示をします。

このあと、中学生の鋭い感性と素直な気持ちから生まれる主張を私たち大人に真っ直ぐ届けてくれることを楽しみにしています。発表するみなさんは、緊張されるかもしれませんが、こういう場での発表はなかなかできない経験ですので、どうか楽しんでください。

子ども達を日頃からご家庭で支えてくださっている保護者の皆様、並びにコミュニティ・スクールの推進に様々なご支援・ご協力をいただいている地域の皆様につきましては、この場をお借り致しまして、改めて感謝申し上げますとともに、大会運営や生徒のご指導にご尽力いただきました各中学校の先生方をはじめ、関係各位に厚くお礼を申し上げます。

結びにあたり、本大会が今後の中学生の皆さんの更なる成長の場となることを祈念し、主催者を代表してのご挨拶といたします。

宇治市「中学生の主張」大会実行委員会
実行委員長 木 上 晴 之

主 張 発 表

責任

西小倉中学校3年 ^{あさ}浅 ^だ田 ^り莉 ^ま菜

皆さんは「責任」とはどういう意味か知っていますか。責任とは、人や団体がなすべき努めとして、自身に引き受けなければならないもののことです。例えば、罪を犯した時、その罪を償うために、罰金を払わされたり、懲役を科せられたりする、こういうことを「責任を負う」と言います。

私が母と朝食を食べていると、テレビであるニュースが取り上げられていました。そのニュースでは、「プールの水止め忘れ続出、教員の責任はどこまで？」というテロップとともに、去年の神奈川県川崎市のニュースがとりあげられていました。「教員のミスによってプールの水が6日間流れ続け、190万円が無駄になり、市は半額の約95万円を教員と校長に請求した。」というニュースです。この請求に対して、市には「教員がかわいそう。」や、「プールの管理は教員の仕事なのか。」というような、批判的な意見が寄せられたそうです。

このニュースを見た母は、「教員がかわいそう。」と言いました。ですが私は、母の意見とは正反対な意見を持っていました。自分のミスなんだから自分で責任をとって当然。どうして教員がミスしたことの責任を、何もしていない市や校長が負わなければいけないのかと思ったからです。それを伝えると、母は「でもこんな大金を一人で払わせるのはかわいそうじゃない？」と言いました。確かに、一人でこの大金を払わせるのは大変だし、かわいそうかもしれません。ですがそれを他の人が払うのは正解なのだろうか、そんな疑問が残りました。

日本には、国家賠償制度というものがあります。国家賠償法の第1条では、次のように定められています。「一、公務員の過失によって他人に損害を加えたときは、国が賠償する。」「二、前項の場合において、公務員に重大な過失があったとき、国は公務員に対して求償権を有する。」です。つまり、どこまでなら国が賠償して、どこまでなら教員が自分で支払うのかという明確な基準はないのです。この制度があることで、公務員の責任は国の責任と定められています。ですので、このプールのニュースで教員のミスの半分以上を国や市が負担するのは、国が定めたことだったのです。

確かに、学校を管理しているのは校長や教頭で、だからこそ管理責任という言葉があるのかもしれません。ですが、市が公務員に半分の金額を請求したのは、妥当な判断だったのか、私にはまだ分かりません。それは私が、まだ働いたことのない中学生だから、だと思えます。全てミスした者が負担するべきだということは、働いていないから言える事かもしれません。私が社会に出て働くようになった時に、自分のミスの責任を他の人が負うことにならないように、責任をもって行動し、よりよい社会にしていきたいと思いました。

戦争という過ち

広野中学校3年 いの うえ れい ね
井 上 玲 音

皆さんは知っていますか。戦争は最大の人権侵害であることを。

私は以前、曾祖母に戦争の話を聞きました。第二次世界大戦中、飛行機工場で働いていた曾祖母は、空襲警報が鳴ると数キロ先の自宅に帰るため走って逃げましたが、思いの外空爆が早く始まり、身を隠す場所がなかったため、何とかせねばとの思いで側溝に入り、爆弾が当たらないようにと祈ったそうです。その話を聞き、私はより身近に戦争の恐怖を感じました。ニュースではいつも世界のどこかで戦争をしていて、戦争と平和に興味を持ち、もっと理解を深めたいと思った私は、家族と広島の実爆ドームを訪れました。平和記念公園や、平和記念資料館などたくさんの場所を見て回りました。当時の時計や服、写真や資料からはたとえ教科書などで同じ内容のものを見たとしても、そこからは得られない凄惨さや悲惨さが現場にはありました。原爆ドームのすぐ近くでは、たくさんの語り部の人たちが話をしていました。そこで話を聞いていたのは、私たち日本人だけでなく、様々な国籍の人たちでした。資料館やそのまわりにいた人の半分以上は日本人ではありませんでした。たくさんの様々な海外の人たちがこの場所を見に来ていたのです。彼らはこの歴史をどう思っているのでしょうか。二度と繰り返してはいけない。と同じように感じてくれているのだろうか。日本人は日本の平和と現状をどう思っているのだろうか。この歴史を学んで、戦争はしない、絶対にしてはいけないと、彼らも同じ思いを抱いてくれていると信じたいです。そしてこのシンプルな願いが叶い難く、難しい課題であり続けていることに、憤り、悲しさ、無力さを感じます。私はただひたすらに、今のこの平和が続くことを願うしかありません。

先ほどの話ですが、曾祖母が側溝で恐怖で狂うように祈っていた少し先で、曾祖母の友人が爆弾に当たり、亡くなったそうです。この話はいつ思い出しても、胸が苦しくなりますが、それ以上に核爆弾の恐ろしさはあまりに悲惨で無惨で強烈で圧倒的な地獄だったようです。そんな爆弾が1945年、約80年前には存在していました。もしも今日本がまた戦争を繰り返すようなことがあれば、どのような爆弾が空から降ってくるのでしょうか。唯一の被爆国である日本がまた、世界初の地獄の更新をする可能性は否定できません。原爆死没者慰霊碑に刻まれている「過ちは繰り返しませぬから」この言葉がうそになってはいけないと、私は心から思うのです。

「家族」の形とは

立命館宇治中学校3年 ^{あさ}浅 ^わ輪 ^{ゆう}優 ^た太

皆さんは、「家族」と言われて、どのようなものを想像しますか？自分がいて、父がいて、母がいる。兄弟や、祖父母がいる人もいるかもしれません。しかしそれが「普通」とは限りません。

私の父は、私が生まれて9か月で、南米のブラジルに、単身赴任しました。私と母は、2、3年もすれば帰ってくると言われ、安全で過ごしやすい日本で待つことにしたそうです。しかし、それから父は、14年以上、海外で仕事をするようになります。

私が小学校1年生になるとき、母と私はブラジルに引っ越し、父と暮らすことになりました。ですが、私と母が住んでいる場所と、父が仕事をしている場所は、遠く離れていたため、毎日一緒に過ごすことは叶わず、週末に帰ってきて、家族で過ごすという状況でした。この状況が小学校1年生から、小学校6年生まで続くことになります。私は、日本の中学校に通うために、母と日本に帰国しますが、父は次に、中米のコスタリカに単身赴任することになりました。父が日本に帰って来たのは、その2年後のことで、現在は東京に単身赴任しています。

このように、私は人生のたくさんの時間を、父と過ごしているわけではありません。周りからすると、とてもユニークな関係に見えるでしょう。ですが、父はできる限り、学校行事には出席してくれましたし、いつも私を気にかけて、応援し、背中を押してくれます。ですから、私にとっての家族は、この形が「普通」なのです。

また私は、この夏に研修旅行で2週間、オーストラリアでホームステイをしました。ホストファミリーはみんなとても親切でやさしく、まったくの赤の他人の私を、家族の一員として受け入れてくれました。たった2週間でしたが、毎日をととても楽しく過ごし、たくさんの思い出と一緒に作ってくれました。私は彼らを一生忘れないし、これからも大切なもう一つの家族だと思っています。

このように、「家族」の形とはいろいろなものがあると思います。物理的な距離や時間、血縁関係があるかないか、どんな言語を話すのか、父がいるかいらないか、母がいるかいらないか、性別や年齢、国籍などに関係なく、様々な形があると、私は思います。

私が思う「家族」とは、周りが普通か、普通じゃないかを決めるのではなく、自分自身の心の中にあるものだと思います。家族は一つでもいいし、複数あってもいい。人生の中で形を何度か変えていってもいい。どれだけ距離が離れていても、過ごした時間が長くなくても、お互いを大切に大事に思いあい、気遣い、励ましあえる人がいてくれること、自分らしくいられるところを、私は「家族」だと思います。私は、この世界がそのたくさんの形を理解して、当たり前のように受け入れられるようになってほしいと、願っています。

怪我から学んだこと

東宇治中学校3年 やまもと りむ 山本 梨 夢

私は、部活動を頑張っている人たちに伝えたいことが二つあります。一つ目は、経験したことを忘れないでほしいということです。もう一つは厳しい状況でも逃げずに挑戦してほしいということです。

私は陸上競技部で3年間活動していました。1年生の時、私はぐんぐんとタイムが伸び、一つ上の学年とも競えるようになり、大会でも良い結果を出していました。しかし、もうすぐ冬季練習が始まるという時に、ジャンパー膝という大きな怪我で立てないほど膝が痛くなりました。病院に行くと、2週間部活を休まなければならないと告げられました。今考えると、大事な冬季練習を2週間休むということは最悪の状態ですが、その時は大会がないので、2週間くらい大丈夫かと思いました。筋トレや走り込みもせずに家でゆっくりしていました。練習復帰後もまだ痛みが続くことを理由に、体力をつけるための200メートル、300メートルの走り込み練習を休んでしまいました。

怪我が治ってきたころ、「絶対1位がとれる」という自信をもって、2年生初の大会に臨みましたが、1年生の時は勝っていた選手に負けてしまいました。しかも、タイムがぐんと下がっていました。その時、私は「今日は調子が悪かったから仕方がない」と自分に言い聞かせていました。その後も大会が続きましたが、ベストは出せませんでした。一番大事な夏季大会では、去年の2位から4位になり、賞状がとれず、個人で府大会に出ることもできませんでした。陸上競技はポイントで競い合う競技なのに、2ポイントも下がり、部員や先輩たちに迷惑をかけてしまい、自分に腹が立ちました。あの時怪我さえしなければ、ちゃんと練習しておけば、と今でも後悔しています。

それから私は、シンスプリント、ハムストリングスの軽い肉離れなど様々な怪我をしましたが、絶対に練習から逃げませんでした。走れないときは筋トレをし、本気で走れない時は、ゆっくり長い距離を走って体力を付けました。冬季練習では、200～300メートルを走り込みました。自分が今できることを探し、怪我をしないよう工夫し、どんなきつい練習でも挑戦し続けました。

冬季練習が終わり、最高学年になった初の大会で、やっとベストを更新することができました。その後の大会でも更新し続けて、最後の夏季大会では2位、山城大会では5位、夢にまで見ていた府大会に個人で出場することができ、嬉しくて涙が止まりませんでした。あの時の悔しさをばねにして、練習を頑張ってきてよかったと心の底から思いました。

みなさん、もし怪我をしてしまっても、今自分ができることを探してみてください。そうすると自分の課題点や、今まで実績が残せなかった原因が見つかり、今より活躍できるようになると思います。私は、自分がそれをできたから実力を伸ばせました。あの時の悔しさを忘れなかったからこそできたことだと思います。

3年生には、高校受験という大きな大会があります。私は陸上部で学んだことを高校受験でも生かし、どんなに大変な時でも諦めず挑戦していきたいと思います。皆さんも今できることに挑戦し続けてください。

夢を持っていない自分

西宇治中学校3年 ^{まつ}松 ^{もと}本 ^り莉 ^な奈

私は今、夢を持たないことへ危機感を覚えています。その理由は、高校受験を目前に夢を持つことの大切さが分かってきたからです。

夢はあるか、と聞かれても、私は何もないと答えることしかできません。特にやりたいこともなく、好きなことはあっても趣味の域からでない程度のものばかり……。最初は自分の好きなことを活かせる仕事がしたいと思っていましたが、自分が持っているものの小ささに気付くと、そうとも思えなくなってしまいました。夢について考えれば考えるほど、自分がどうしたいのか、どうなりたいのか、より一層わからなくなり、その時が来たら考えればいい、と結論づけて考えるのをやめました。これが去年までの話です。

将来について、また考えなければいけない、と思ったのが今年、3年生に上がった時のことです。高校については、正直迷いがありませんでした。校風や部活動に惹かれる高校があったので、そこを目標として努力すると決めました。しかし、一旦の目標が決まった安心感よりも、先にある未来への不安の方がどうしても大きくなってしまいます。理由は単純で、将来自分が何をしているか想像できないからです。「夢を持っていないと進むべき方向が分からなくなる」というのは、このことだったのだと思いました。今は夢を持っていないといいと自分を甘やかしていたことに気付かされました。

しかし、誰もが最低一つは夢を持っているのかと言われたら、そうではないと思います。夢は必ず持たなければならないものではありません。だから、夢を持たない人がいても当然だと思います。もっと言えば、将来の夢が明確になっており、人生設計がきっちりできている人の方が稀だと思います。だとしても、「今じゃなくてもいい」と、夢を持たないことに理由をつけて逃げるくらいなら、悩み、考えた末に出した結論が、「自分は夢を持っていない」である方がよっぽど良い気がするのです。これは完全に持論ですが、夢を持たないことと、持てないことは紙一重であると考えています。夢を持たないのは、最初から諦めて投げ出していること。持てないのは、夢を持ちたいけれど、自分がどうしたいのか分からないこと。持っていないのは同じでも、内容が全く違います。

夢を持つ、と言っても職業や憧れる人など、幅があり過ぎてよく分からないかもしれません。しかし、「あんな仕事をしてみたい」、「優しい人になりたい」など、無意識に持っている小さな願望が大きな希望になる日が来るかもしれません。夢がどこまで夢なのか、全てを理解するには、まだまだほど遠いと思います。それでも、自分がどうしたいのか、今度は考えるのをやめず、これが夢だと胸をはって言えるようなものを見つけていきたいです。

私のこと

北宇治中学校2年 つじ い ゆ め
辻 井 柚 芽

「何でこの子しゃべらへんの？」

これは私が小学生の時に言われて傷ついた言葉です。私は人と話す事が苦手です。小学校に入るまではまだ少し話せていたという事もあり、苦手だという事にすら気付いていませんでした。家族とも普通に話をする事が出来ていたのも特に不安や心配もなく過ごしていました。小学校へ入学してその気持ちに変化が現れていきました。それまで感じた事の無い張りつめた思いや緊張が自分自身に押し寄せてきたのです。

私が学校生活で一番辛かったのが発表の場面でした。発言したい気持ちはあるのに声が出ないからです。声を出そうとすると緊張して体が硬くなり、のどがギュッと閉じて思うように体の自由がきかなくなります。これは発表の場面だけではなく、誰かに話しかけられた時と同じようになります。声をかけられてすごく嬉しいのに上手く返せなくて本当に申し訳ない気持ちでいっぱいになります。「ありがとう」「ごめんね」このたった一言をどうして伝える事が出来ないのか、どうして皆と同じように出来ないのだろうか、そんな自分を責めた時期がありました。

そんな時、私にとって思いがけない転機が訪れました。小学校生活最後の年に担任の先生から少しずつでいいから発表出来るようにチャレンジしてみようと提案されたのです。最初は絶対出来ないと消極的になっていたのですが、まずは画面越しに声を出す練習から始まり、それから皆にあいさつが出来るよう周囲に意識を向けたり、そして最終的には最後の参観で声を出して発表する事が出来るまでになりました。終わって「良かったよ」と声をかけてくれた友達の言葉を私は一生忘れません。

今でも話す事は苦手だけれど話す事への苦手意識は前より薄れてきているように思います。それは私の気持ちが外へ向けられるようになった事と変わらず声をかけてくれる大切な周囲の存在があるからだと思っています。言われて傷ついた言葉がある一方で私が話せなくてもその気持ちを感じ取って共感してくれたり、ただただ近くにいてくれたり、言葉だけではないコミュニケーションで私の緊張してカチコチだった心を解きほぐしてくれたり、そういった嬉しい経験が私の心の支えになっています。人は誰かの言葉に傷ついて辛く悲しい経験をするとその人だけでなく周囲の人皆が怖くなってしまう事が、きっとあると思います。けれどその傷ついた心をいやしてくれるのもまた人の言葉であると自身の経験から感じ取る事が出来ました。もし私が普通に話をする事が出来ていたなら気付かなかった事かもしれません。人の優しさに触れたり、気付いたりした事で見える景色も変わり、私が私で良かったと自分を肯定する事も出来ました。それもこれまでの色々な人達との出会いがあったからこそだと思っています。誰でも一步を踏み出す事はすごく勇気のいる事です。自分一人だと克服出来ない事も周囲の助けがある事で乗り越えられる、私が一番伝えたい事です。

今いる環境に感謝しながらいつかは自分自身が誰かに声をかけられる存在になれたらと思っています。

体感時間

南宇治中学校3年 ^{まつ}松 ^{むら}村 ^る瑠 ^あ愛

私には日々生活をしていて、ある疑問があります。それは楽しいことをしている時の時間と、少し嫌なこと苦手なことをしている時の体感時間がかなり違うということです。

皆さんも感じたことがあるのではないのでしょうか。例えば勉強をしていて「まだ1時間も経っていないのか」と感じたりします。ところが、ゲームをしていると「もう1時間も過ぎていいのか」と思うことがよくあります。あきらかに体感時間が違っているのです。なぜ感じ方が違うのでしょうか。

思うにそれは、時間の注意を向ける頻度が高いときほど、時間が経つのが遅く感じるのではないのでしょうか。

皆さんは授業中何度も時計を見てはいませんか。私は教科によってはよくやってしまいます。時間にばかり注意を向けて、結果余計に時間を長くしてしまっているのです。逆にそのとき大好きなことや自分の趣味の活動をしている時は、集中していて時計をほとんど見ていないので、時間が経つのが驚くほど短く感じるのです。つまり時計を見る頻度が高いほど時間は長く感じるのです。

又、私にはもう一つ別の疑問があるのです。それは、毎年去年よりも、今年の方が時間が速く過ぎているように感じるということです。人生だと体感時間はどうなるのでしょうか。

皆さんは人生の半分は何歳くらいだと思いますか。今、日本人の平均寿命が約80歳らしいので、その半分の40歳くらいになると思います。ですが実は、人は生まれてから20歳までと20歳から80歳までの体感時間は同じだと言われているのです。つまり、人は20歳で人生の半分か過ぎ去っていると感じるらしいのです。これは「ジャンネーの法則」といい、人生のある時期に感じる時間の長さは年齢の逆数に比例するというものなのです。簡単に言うと、歳をとるにつれて自分の人生における「1年」の体感時間が短くなり、時間が速く過ぎていると感じるということです。例えば1歳では1年を365日と感じますが、中1では28日、中2では26日、中3では24日と1年の体感時間が減っているのです。1年が26日なんてとても受け入れ難いですが、考えてみると、私も1年の頃よりも3年の方が時間が経つのが速いと感じています。

これにも理由があり、人は初めてのことや、経験したことがないことをしている時は、それが強く印象に残り時間が長く感じますが、反対にその行動に慣れてしまうと印象は薄れるため、あっという間に時間が過ぎたように感じるということです。

このことを知った時、たしかに1年の頃は学校生活も部活もテストも何もかもが初めてで、強く印象が残っていました。そして3年になるといつもの日常に慣れて、それが繰り返しのようを感じるので、時間は速く進むのだとわかりました。

なので人生でも、20歳までは新しいことをたくさん学び、20歳以降はあまり新しいことを学ぶことが少なくなり、あっという間に1年が経つので、人生の体感時間の半分は20歳だと言われているのです。

中学生では1年を26日に感じると言いました。一日が長いと感じても1年で見ると26日にしか感じないのです。一日がどれだけ大切なかがわかりました。きっと今年も速く時間が過ぎてしまいます。一日一日をムダに過ごさず、後悔のないようにしていこうと思います。

「守られる」から「守る」に

木幡中学校3年 こ ばやし 小 林 つばめ

今年2024年は、お正月は能登で、夏休みには鹿児島、岩手などで大きな地震が絶えません。なにか災害に遭ったとき、中学生はどうしても守られる側にいます。では、私たち中学生にできることはないもののでしょうか。私は能登半島地震を経験し、地震などの災害に対して自分は何ができるのか考えるきっかけになりました。

2024年1月1日。その日、私は石川県宝達志水町にある祖父母の家に来ていました。宝達志水町は海から近く、祖父母と同世代の方が多く暮らす田舎町です。大きな休みに親戚が集まりみんなで過ごす、私の大好きな時間です。そんなゆったりとしたお正月の夕方、能登半島地震が北陸地方を襲いました。突然スマートフォンから大きな音が流れ、大きく家が揺れ始めると、地震が来たのだとわかりました。しかし、その揺れはすぐに収まりました。「大きな地震だったね」とテレビにみんなが集まってきた頃、もう一度もっと大きな揺れがやってきます。しばらく座卓の下で揺れがおさまるのを待ちましたが、恐怖のあまり涙が止まりませんでした。長く大きな揺れがつづくうちに、今まで経験してきた地震とは訳が違おうと皆が感じました。祖父の「家が潰れる！家を出ろ！」という声を聞き、座卓の下から出て揺れの続く中、家を飛び出しました。靴も持たず、とにかく家から離れたところへ走りました。そしてまた、みんなが集まったところに、市の防災無線が響きます。怖いチャイムが鳴り、慌ただしい役所の音声が聞こえました。

「津波警報が発表されています。急いで高台に避難してください。」頭が真っ白になりました。死ぬのかな。死ぬのは嫌だな、としか考えていませんでした。それしか考えられませんでした。とにかく大人たちが言う方向に、走りました。1、2分で高台にある地域の集会所に着き、それでも不安でずっと「ここは大丈夫か。ここに津波はこないか。」と聞いていたことを覚えています。そのまま暗くなる頃には集会所の中に入り、お菓子やお茶を分け合いました。

一晩、避難という形で過ごす中で改めて感じたのは、中学生は守られる側の立場にあるということです。大人たちは私たちが寒い思いをしていないか、体調が悪くないか、と気にしていました。私の父や叔母は、家に帰って布団を取ってきたり、おにぎりを握ったりしました。築百年以上は経っている家で、余震も続き、津波の警戒もある中でどんなに怖かったらと思います。私の他にも子どもはいましたが、一番下で中学1年生だったので、寒いのもお腹が空くのも我慢できない歳ではありません。何が起こるかわからない状況で、子どものために大人が無理をして欲しくないと思いました。今回の地震でも、実際にそうして亡くなった人がたくさんいます。

私は、そんな状況の中で、自分の意思や気持ちをしっかり言葉にして伝えるということが大切だと思いました。大人でもこんな状況では、間違った判断をしてしまうかもしれません。もし誰かが危険な場所に戻ろうとしていたら、行って欲しくない、行くべきでないと伝えることは中学生にもできます。また、親や祖父母、兄弟、友人などを精神的に支える、守ることもできます。私は支えられる立場でしたが、そばにいて何気ないことを話しているだけで心が軽くなりました。

私はこの経験を通して、中学生でも守られるばかりでなく、誰かを守ることができると思いました。防災について学ぶとき、自分はどう行動するのかについても考えてみて欲しいです。

命のつながり

檳島中学校3年 ^ゆ湯 ^{かわ}川 は な

8月の初め、祖父の3回忌法要がありました。一昨年8月に亡くなった祖父は、私の母の父親です。その法要をきっかけに、今まであまり考えもしなかったのですが、「私は誰?」「私はどこから来たの?」という疑問が沸き起こりました。当たり前のことですが、私には両親がいて、その両親にもまた、それぞれ両親がいて・・・と遡っていくと、私から十代前までの先祖の数は2千人を超え、さらに四十代前ともなれば、何と2兆人以上にもなるといいます。だとすれば、今この場にいる人たちはもちろんのこと、ほとんどの人々がみんな同じ先祖をもつ家族のような関係であると言っても過言ではありません。その先祖たちが何十代にも渡って、命や想いをつなげてきてくれたからこそ、今、私たちはこうして生きているのです。そして、そのとてつもなく長い間には、想像もつかないような困難にぶつかったり、さまざまな苦境に立たされたことも数多くあったに違いありません。それでもそれらを乗り越え、私にまで命をつなげ、届けてくれたのです。その間、何億、何兆人という、とんでもない数の先祖の内の、たった一人でも途中でいなくなっていたら、今私はここにはいません。私が生まれてきたことは、まさに奇跡に近いと思うのです。私は、「この両親のもとに生まれよう」と自分の意志や力で生まれてきたものではありません。何百年、何千年という長い間、途切れることなく、我が子に対する親の深い想いがあったからこそ、私が生まれてくることができたのです。それは決して私だけではありません。今を生きている全ての人たちが、気が遠くなる程たくさんの人々に幸せを願われて生まれてきたはずなのです。そんな願いや想いを込められた命が繋がったからこそ、私たちは生きているのです。一人ひとりの命に、みんな等しく量ることのできない重みがあり、その重さは長い歴史の重さでもあると思います。

それなのに、地球上ではずっと、戦争や紛争が絶えた間がなく、いじめや虐待、また大人に限らず、中学生や高校生の自殺のニュースを聞かない日はありません。人が人を傷つけ、虐げ、拳銃の果てに死に追いやるなど、そんな行為は誰にも幸せをもたらしません。「自分さえよければいい」とか「自分の都合に他人を従わせよう」とか、そういう考えが他者の命を粗末に扱ってしまうことに結びついているのではないのでしょうか。

お互いを尊重し合い、個性を認め合い、信頼する関係を築くことができれば、平和で自由な世界が広がると思います。

また、もし、毎日の生活の中でうまくいかないことや、辛い思いをすることがあったとしても「どうせ私なんか・・・」と自暴自棄になるのではなく、遥か昔から受け継がれてきた「命」を今、自分の番を生きているという重み、責任を忘れてはならないと思います。

祖父の法要が済んで、しばらくしてお盆を迎えました。今まで遠い遠い過去の人たちだった先祖が、すぐ傍で私を囲み、見守って応援してくれているような気がしました。

そして『私』もまた、命のリレーの途中にいます。自分自身を大切に、周りの人を大切に、一日一日を大切に・・・。

私にまでつなげてもらったこの「いのち」を次の代にバトンタッチするまで、一生懸命に、生きていこうと強く思います。

犬か猫か

黄檗中学校3年 はねだ さ なみ
羽根田 沙 南

「犬派か猫派か」私はこの質問を何十回とされたことがあるし、これからもされるんだろうと思っている。しかし、なぜ「犬」と「猫」なのだろうか。亀派だってウサギ派だってコウモリ派だってし、ただ「好きな動物は」と聞くだけではいけないのだろうか。

私は「犬か猫か」と聞かれた時には少し困ってしまう。別に犬や猫がすごく嫌いというわけではない。犬も猫もかわいと思うし、どちらかというところ「好き」なほうである。でもどちらが好きとはっきりしているわけではなく、その質問をされた時の気分で答えている。

そもそも、犬派か猫派か、という話をするとき、相手は「飼うのならどちらか」ということを聞きたい場合が多い。私自身、動物園に行ったり友達の家でペットを見るのは好きである。見ると「かわいいな」と思う。しかし、なかなか「飼いたい」という感情にまではならない。なぜかという動物を飼うとなれば、餌や医療費など色々な場面でお金が必要なのはわかってし、散歩などの世話も必要だ。家をぐちゃぐちゃにされるリスクだってある。それに旅行に行くとなると、どこかに預けるか、一緒に行けるところに場所を決めるかなど、色々と考えなくてはならないことが増えてしまう。きっと動物が好きで愛の力で何事も乗り越えてしまうのだろう。しかし、そこまで動物が好きではない私にとって「動物を飼う」ということはなかなか厳しい問題なのだ。

そんな私にも好きな動物がいる。この前動物園に行った時に見たハクトウワシだ。私が見た時ちょうど飼育員さんが餌やりをしていた。飼育員さんが餌をピンセットでつまみ、笛を吹くとハクトウワシが飛んでくるのだ。ビジュアルがかっこいいのはもちろんだが、その賢さに感動した。そのように餌やりをするのは安全性やゆっくり食べさせるためだと思うが、普段は鳥と言えばスズメとかカラスしか見ることができないので、良い経験になった。ハクトウワシを見るのは面白いと思ったが、飼いたいという感情にまではならなかった。

私は「ハクトウワシ派ですか」と聞かれたことはない。しかし、「好きな動物は」と聞かれたなら、「ハクトウワシ！」と答えるだろう。ここで私が訴えたいのは、相手が二択のうちどちらかに当てはまると決めつけるのではなく、もっと広い視野で物事を考えるべき、ということだ。例えば犬猫の話で考えると、もちろん「犬派」「猫派」とはっきりとした意見がある人もいる。しかし、「どちらも好き」や「どちらも嫌い」「犬よりも猫よりもハクトウワシが好き」など、答えは無数に存在するのだ。

現代の私たちには色々な考えを持つ人を理解することが求められる。性の在り方も同じで、昔は「男」「女」の二択でまとめられていたものが多様で無数のものになってきている。生物学的な話や戸籍上ではどうしても二択に分類されてしまう。けれども、LGBTQ+という見方があるように、様々な人や考え方があるのだ。学校でもつい最近LGBTQ+に関する講演会でたくさんのことを教わった。私も初めて聞く話ばかりですごく勉強になった。このように日本での多様性についての教育は日々進んでいると思う。しかし、実際には無意識のうちに二択として考えている部分は貴方にもあるのではないだろうか。

これからの私たちにはたくさんの個性があるべきだ。そして、それを受け入れることも必要である。犬や猫が好きで個性だし、どちらも嫌いなことも個性。そんな一人一人の個性が大きな世界を作り、個性があふれる面白くて幸せな世界になればいいと思う。そのためには二択にこだわらない、もっと自由な考え方を誰もが持つべきだ。

誰もが生きやすい素敵な世界にするために「好きな動物は？」と尋ねてみてはどうだろうか。

家族を想う毎日

宇治中学校2年

さか もと も も か
酒 本 百々 香

あなたは「家族」というものは何だと思う？家族がいてどんな影響があるのだろうか。私はもともと一人っ子のままだったかもしれない。だけど私はずっと下の子がほしく、ポポちゃんを一日中ずっと世話をしていた。その姿を見たお母さんは、「この子のためにも下の子をつくってあげたい」と思ってくれた。だけどなかなかうまくいかず、不妊治療をしていた。私のために仕事の帰りに治療に行ってくれていた。お母さんはとても大変そうだったけれど、お母さんのおかげで可愛い可愛い弟が生まれてきてくれた。弟がうまれてきた瞬間をしっかりと、今でも覚えている。きっと私にとって、すごくすごく嬉しい瞬間だったのだと思う。元気に産声をあげてくれて、本当に良かった。親ではないのに、私が親になったぐらい嬉しくて、私はこの子を一生大切にすると誓った。とてもじゃないくらい、きれいごとに聞こえるかも知れないけれど、私は本当に心からそう思っている。お母さんに「生んでくれてありがとう」と心から伝えたい。私は弟ができてからポポちゃんではなく、弟を毎日毎日可愛がっていた。何もかもが初めてで、ご飯をあげたり、お風呂に入れてあげたりできるのがとても嬉しくてワクワクした。はりきりすぎてうまくいかないときも多々あった。今では、そのことも忘れてしまうぐらい良い思い出がつまっている。一緒に旅行に行った思い出、公園ではしゃぎまわった思い出、ちょっともめた思い出、全てが良い思い出に変わる。だから今でも弟がけがをして帰ってきたときは、私ではないぐらい戸惑ってしまう。それが「家族を想う」ということなんだと私は思う。将来私にも子供ができたとき、どれぐらい嬉しいことなんだろう。その気持ちはきっとそのときじゃないとわからないのだと思う。けして嬉しさだけだとは限らないこともじゅうぶん分かっている。きっと不安もあるだろうし、怖さもあると思う。生まれてくるまで何が起こるか分からない。だからただ元気に生まれてきてくれるだけを願って毎日を過ごすのだろう。生まれた瞬間、怖さや不安がふっとぶぐらい嬉しさが勝つのだろう。やっぱり命は尊い。生まれてから家族みんなでご飯、公園で一緒に遊んでいる姿を想像すると、どれだけ幸せなことか。言葉に表せないぐらいだ。私はふとした瞬間に幸せを感じる。例えば朝起きて、「おはよう」と言える人がいる。「いってらっしゃい」「おかえり」と誰かを見送って誰かを待つ、そういう一見普通の日常に見えることもあたり前じゃない。そのことを理解して生きてほしい。きっと辛いことがあっても、なにもかもが幸せに感じるから。「家族を想う毎日」この題名は命の尊さ、家族という存在はなんなのか、そういうことを教えてくれる題名にした。あなたは今もし家族の一人でもいなくなったらなんて想像できる？たぶんできない人のほうが多いと思う。毎日学校から帰ってきて夜にはご飯を食べて、お風呂に入って寝る。そんな当たり前に過ぎていく毎日は奇跡なんだよ。「いってらっしゃい」と言ったあと、「おかえり」がもうないかも知れない。そう考えたら一日ってすごく大切な日なんだ。生きることがいやになる時、そのときは身近にいる家族、親友、大切な人に頼っていいんだよ。いつだってあなたの味方なんだから。だから私は身近にいる大切な人を毎日大切にしてほしい。私が伝えたいのはただこれだけだ。楽しむんだ毎日。悔いだけを残さないように……。

講 評

宇治市連合育友会

会 長 青 木 英 明

本日、宇治市「中学生の主張」大会で発表された生徒の皆さん、素晴らしい発表をありがとうございました。皆さんが日々の生活の中で感じたことを、主張として堂々と発表される姿には、大きな感銘を受けました。皆さんの想いは、この会場に来られた方々の胸に、必ずや届いたと感じています。

さて、今年の発表を少しだけ振り返りたいと思います。

ニュースで知った、他人のミスから自分自身が今後考えなければならない「責任」を見つめなおしたこと。おばあちゃんが経験した戦争、そして広島に残る戦争の記憶から、平和の意義を問い直したこと。自分自身が経験した家族のかたち、そして海外での経験から、「家族」の姿と多様性を願ったこと。怪我に負けずに頑張った部活動の経験から、あきらめず「挑戦」し、課題を克服する大切さを学んだこと。「夢」ということを通して、今までの自分を見つめなおし、考え続けるというこれからの決意を胸にきざんだこと。「言葉」の大切さや、周囲の人の大切さを、自分自身の経験を通して、人に伝えたいと決意し実行できたこと。自分自身の体感時間の違いから、「時間」の大切さを感じ、これからの人生に生かそうと決意したこと。能登半島地震で被災し、経験したことをきっかけに、人を守る「防災」について、今の自分にできることを探したこと。おじいちゃんの死をきっかけに、他者を尊重し、「命のリレー」の中にいる自分自身に向き合ったこと。よく聞かれる質問をきっかけに、二者択一ではない幅広い「視野」を持つ重要性を感じ、個性が尊重される世界を望んだこと。新しい家族が誕生したことをきっかけに、「家族を想う」あたたかい世界と、かけがえのない毎日に気付いたこと。

全ての発表が、一日一日、日々悩み、考え、学びながら成長する、中学生の皆さんを待つ希望ある未来と、皆さんがいる限り、この社会がこれからも歩みを止めず進んでいけることを表しているように感じました。

皆さんがこれから歩んでゆく社会は、今、大きな変化の時代を迎えています。ほんの10年前までは未来のおとぎ話であったAIは、今や人間と対話を行うようにもなり、気候変動に伴う異常気象は、これまで考えられなかったような規模で、全世界で問題を引き起こしています。そんな中であっても、幸せは必ず身近なところにあります。これからの未来、希望は皆さんひとりひとりの、生きる力、自分で問題を解決してゆく力にかかっています。皆さんが今日発表されたように、普段感じている自分の想いを、他の人たちに伝え、届けることは、これから成長していく上で必ず大きな力となります。

主催する私たち大人は、そんな皆さんを必ず支え、励まし、ご家族、学校、地域一体となって、皆さんの成長を見守りたいと思います。

最後になりましたが、本大会の開催にご尽力いただいた皆様方に、心から感謝を申し上げ、講評とさせていただきます。

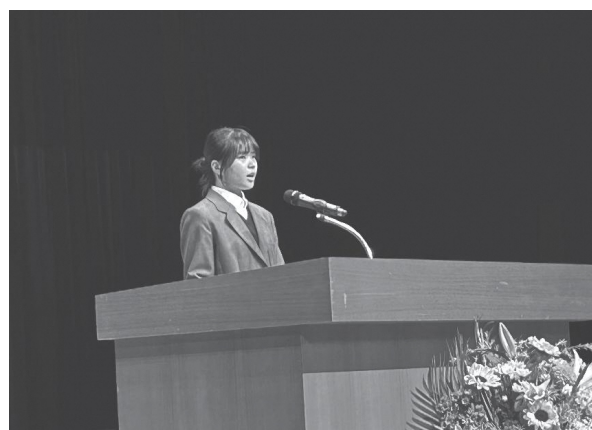
表

彰



宇治市教育委員会賞
北宇治中学校2年 辻井 柚芽

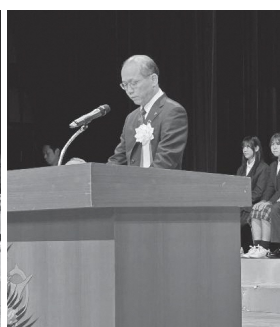
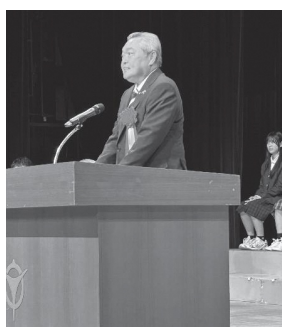
宇治市青少年健全育成協議会賞
木幡中学校3年 小林 つばめ



宇治市連合育友会賞
榎島中学校 3年 湯川 はな



第43回 宇治市「中学生の主張」大会の振り返り



生徒司会 表紙絵 生徒司会
3年 2年 3年
宇土あかり 繁井瑞希 小林晴信
(いずれも西小倉中)

京都府立宇治支援学校による展示コーナー



今年度も、2階のロビーで宇治支援学校の取組の紹介や中学部生徒の作品展示を行い、多くのご来場の皆様にご覧いただきました。

閉会のあいさつ

本日は、第43回宇治市「中学生の主張」大会に、多くの方々にお越し頂き、ありがとうございます。

そして、宇治市内11中学校すべての生徒の中から選ばれた、各学校代表の皆さん、それぞれ素晴らしい発表をありがとうございました。先程の講評にもありましたように、とても3賞にはおさまらない程、どの発表も感動を与えてくれました。

この主張大会は、中学生の皆さんが「社会に対して」、「学校に対して」、「友達に対して」、「大人に対して」、どんな想いを持っているのかを、皆で聴いてみたいという想いがきっかけとなり、42年前に始まりました。この43年間、多くの中学生が、色々な発表をしてくれました。その発表の中には、すべての中学生の想いが入っていたと思います。その時代、時代によって、内容は少しずつ変わってきていると思いますが、その発表すべてが、その瞬間の素直な気持ちだと思います。

今回の大会でも、学校生活や家庭等のことも含めて、人間のあり方の内容が多くありました。何事も、一から疑問に思い考えていかなければならないと、改めて、私自身も考えさせられました。

私達大人が、今日の発表を聴いて、今の中学生の本当の気持ちを理解し、それをすべて受け入れ対応は出来ないかもしれません。しかし、発表を聴いた人達は、心に大きく残ったと思います。私達大人は、君達の健全育成の為に全力を尽くす事を、約束いたします。

最後になりましたが、発表してくれた皆さんありがとうございました。また、本日の司会をして頂いたり、表紙絵を描いて頂いたりした、西小倉中学校の皆さん、ありがとうございました。

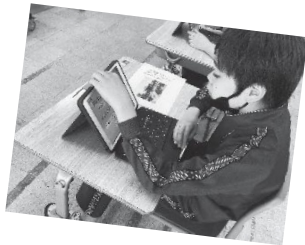
そして、宇治市教育委員会をはじめ、本日の大会運営にご尽力頂いた皆様に感謝申し上げます。最後まで熱心に聴いて頂いた市内中学校の生徒の皆さんと、先生方、会場の皆様に感謝申し上げ、閉会の挨拶と致します。

本日は、誠にありがとうございました。

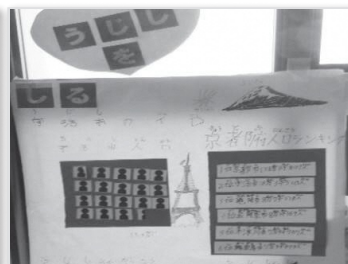
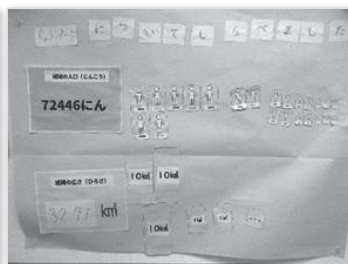
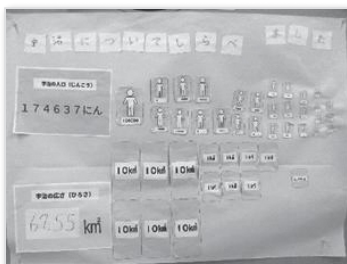
宇治市青少年健全育成協議会
会 長 瀧 繁 行

宇治支援学校 中学部のまなび

宇治支援学校には、宇治市や城陽市在住の生徒が通学しています。生活単元学習「宇治・城陽観光大使になろう!」では自分達が住んでいる身近な市について調べ、市の様子を知ったり、違いについて考えたり、実際に宇治の町に出向き、学んだことを確認したり新たな発見をしたり、素敵なスポットを写真に収めたりして、毎年楽しく学んでいます。



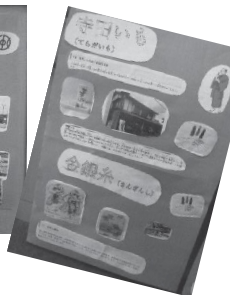
京都府の中で、宇治市の人口は京都市に次いで2番目に多いことがわかったよ!



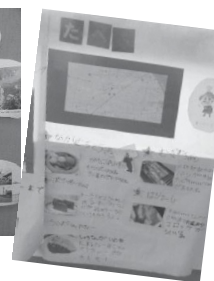
宇治市と城陽市の人口や面積について調べ比べました!



調べたことをマップ上にまとめてみたよ!



やっぱり宇治と言えば「お茶!」校内の茶畑で茶摘みをしました。



校外学習

やっぱり世界遺産「平等院」は素晴らしい!!

「茶づな」で宇治の歴史に触れてきました。

10円玉の裏に描かれている絵と同じだったことを確認。



学校近くのパン屋さんにも行ってみたよ!



和菓子屋さんに行って、宇治の名菓を探し、好きな和菓子を選んで買いました。

主張発表生徒・司会生徒・表紙絵作成生徒と 市長との懇談会 当日の様子

令和6年11月15日（金）午後3時30分より、市役所7階特別会議室にて、松村淳子市長と発表生徒10名（1名欠席）、司会生徒2名、表紙絵作成生徒1名との懇談会を開催しました。



開会后、出席生徒には自己紹介と大会当日の感想等を述べてもらいました。その後市長から、テーマについてや、発表の際の思い出についてなど、ひとりひとりに質問と談話があり、あっという間に終わりを迎えました。最後に、生徒からは「市長の仕事は普段何をしているのか」、「この懇談会はどういう経緯で開催しているのか」等の質問がありました。

松村市長からは、「みんな壇上で堂々としていて、すごくいい発表だった。全員が市長賞です。この経験を活かして、受験がある人はこれから頑張って、2年生のみんなは、まだこれからいろいろなことを体験して楽しんで中学校生活を送ってください。」とのコメントをいただきました。



第43回宇治市「中学生の主張」大会 実行委員会

実行委員長 木上晴之 宇治市教育委員会教育長
副実行委員長 寫繁行 宇治市青少年健全育成協議会会長
副実行委員長 青木英明 宇治市連合育友会会長

【委 員】

永田幸	宇治中学校	石田あきら	立命館宇治中学校
安井竜馬	北宇治中学校	二宮智代	京都府立宇治支援学校
岡田菜摘	榎島中学校	齋藤英司	中学校長会担当校長
山本諒	西小倉中学校	齊藤和男	青少年健全育成協議会副会長
石田創	西宇治中学校	藤田佳廣	青少年健全育成協議会副会長
出口眞	南宇治中学校	宇土明子	連合育友会中学委員長
水嶋優子	広野中学校	福井康晴	教育部長
坂井克己	東宇治中学校	武田義博	教育支援センター長
久保季奈	木幡中学校	安留岳宣	学校教育課長
森山隆仁	黄檗中学校	堀江紀子	教育支援課長

【講 評 団】

寫繁行	青少年健全育成協議会会長
青木英明	連合育友会会長
林口泰之	中学校長会会長
武田義博	教育支援センター長

【事 務 局】

宇治市教育委員会 教育支援センター 教育支援課
〒611-8501 宇治市宇治琵琶33
TEL 0774-20-8766 / FAX 0774-21-0400
E-mail kyoikushienka@city.uji.kyoto.jp

第 43 回宇治市「中学生の主張」大会まとめ

発行月 令和 7 年 1 月

発 行 宇治市教育委員会 教育支援センター 教育支援課

表紙絵 宇治市立西小倉中学校 2 年 ^{しげ} 繁 ^い 井 ^{みず} 瑞 ^き 希

シャーペンには文章を書くこと、メガホンには気持ちを伝えること、
消しゴムには間違いを消せること、という意味を込めました。



宇治市宣伝大使
ちはや姫

2024



宇治市教育の日
シンボルキャラクター
ハチャ君